

「魔の山」完成までのトーマス・マンの 自己検証における長い回り道

(平成8年11月28日 受理)

人文・語学 助教授 宮 島 隆

Thamas Manns langer Umweg zur Selbstbes tätigung in der Vollendung des“Zauberbergs”

Takashi MIYAJIMA

(1)

1914年10月に、地球上の人類が未だ体験したことのない、空前絶後の物質的、文化的な壊滅的と思われた破壊をもたらした第一次世界大戦が勃発した。その破壊こそ、物質的、精神的に予想を絶するものであり、人類史上はかり知れない、回復不可能な後遺症を示していた。と同時にこの途方もない体験の中からの反省と相俟って、平和とより豊かな生活への強い憧れが論文や文学作品の中に反映されている。ドイツに於ける資本主義的秩序に望みを託し、また敗戦後でも回復を願う者、様々な政治的、社会的対決を越えて「芸術的」な内面的価値の追求を作家心情とする者などが現われる。トーマス・マンは当時をいみじくも述懐している。「ここで惨虐と荒涼たる窮乏の幾年、政治的には孤立無援で歴史的には迷妄に捉われたものであったが、真正のものであったことは疑う余地のないドイツの反抗の崩壊、腐敗、潰滅の終始を経験し、外国軍占領下のいまいましい、元気を殺ぐ感情をなめ、国内解体の混乱を忍んだのである。顕著な、劃期的な転換が起って、それが私個人の生活へもかならず深い干渉を及ぼしてくるに違いないという感じは、最初から非常に強く私の胸中に動いていた——この感情は、戦争に対する私の関係に、ドイツ的積極的性格を与えた運命的陶酔の基礎であったのだ。書きはじめていた芸術上の仕事を継続するなどは、考え得られないことであった¹⁾。」この時の多くのブルジョア作家たちが対決した中心的課題は、芸術家庭生活と現実社会、政治権力と精神との対立であった。国家権力と人類文化の進歩とは矛盾せざるを得ないものだろうか？かかる精神解明を目指す志向に於いてハインリヒ・マンとトーマス・マン兄弟は、きわだった相違を特徴として興味を引いた。大戦勃発に際しマンは、信じ難い狼狽と共に「偉大な、実にみごとな、いや、壮大な国民戦争²⁾」と称して、11月には「戦争時の思想」という論文をもって戦争賛成の作家、学者グループに公然と組みした。また同年に執筆され15年の初めに公にされた「フリードリヒと大同盟」という論文は、大王の心理分析と歴史描写によってプロイセンの侵略戦争を賛美するものであった。以上の様な戦争やド

イツ帝国主義への支持を背景にして、兄弟二人の間に不和、個人的な緊張感が醸成されていた。1915年兄ハインリヒは「ゾラ論」を「デイ・ヴァイセン・ブレッター（白い草子）」に発表し、民主主義、反軍国主義の自分の立場を擁護した。

「その紙はオロールと称し1898年1月13日のことであつたが、真実は何十万回も読まれたのである。国家についての考えかたの、そうあつては欲しくない人の稀にしか知りえない真実こそが、ゾラは大統領に、自分のことを先鞭をつけた者だと紹介してきたかつての革なめし工であつたフェリックス・フォール共和国大統領宛てに手紙を書いた。…『我われは正義を欲すればご彼の尊厳をも欲するのです。』不法にも当然かのように無実の人に誤った判決を下した將軍や陸軍大佐たちが問題なのである。…ゾラは凡ゆる人の名をあげ、この犯罪に自分が関与した限りに応じ凡ゆる人に訴えた。自分は如何なる刑法上の結果に身を晒しているかも知らない訳ではない、と云つた。しかし真実と正義との露見を速めるために自分は活動する。早急な解決が要求されているのだ、と。『もし真実が埋没されてしまえば、それは地下で強固になり余りにも大きな爆発力は真実を白日の許に晒し、全てのことが共に飛散してしまうでしょう。』更に彼は云つている。『自分が犯していない犯罪の故に、恐ろしい拷問で遙かの地で償いをしている無実の人の幽霊が、夜な夜な徘徊することでしょう。』³⁾」

「われ弾劾する！」(J'accuse!) という公開文書を、ドレフェス事件時のフォール大統領に送った正義の文豪ゾラの抗議活動をかりて、ドイツのまだ帝国主義戦争下の厳しい検閲を顧慮して比喩のかたちをとらざるを得なかつたのだが、この文書は、ドイツの排外主義的戦争賛の文筆家たちに対するハイリヒ・マン自信の糾弾の宣言文でもあつたことだろう。この様なグループにトーマス・マン、ハウプトマン、デーメール等の作家達が属していたので、マン兄弟の仲たがいのきつかけとなり、文学的または個人的人間関係までも深刻なものとなつた。「デイ・ヴァイセン・ブレッター」は1913年ベツヒャー、シュテルンハイム、ヴェルフェル等の表現主義的左翼ブルジョアグループによって創設されたが、諸論文は闘争的ヒューマニズム、決然とした平和主義を追求して反動的勢力にたいする警告を発してきたので、軍国主義的当局により干渉を受け、出版所をチューリヒへの移転を余儀無くされた。ハインリヒ・マンはこの「ゾラ論」に於いて、正義と真実の擁護者たるゾラを讃え、同時に時の権力者達に対しドイツの避け難い敗戦を予言したのである。

(2)

あの大战開始前の2年間、マン家は不安な雰囲気の中にも嵐の到来も告げられることもなく2、3のことに忙殺されはしたが、比較的静かに時は流れていた。この時代マンは肺カタルに病んでいた妻を伴って、スイスのダボスを訪れた時に得た想念により、特に「魔の山」の執筆に専念していた。これと平行して、イザール河畔に建つことになっていた新居に気を配ることも、楽しみな多忙でもあつた。マンはドイツの破局による亡命の時まで、この邸宅街で19年間の生活を享受して来た。

この様な状況の中での第一次世界大戦の勃発はヨーロッパの凡ての国民が受けたと同

様に、トーマス・マンにとっても衝撃的体験であり、これに激しい反応を示し兄ハインリへの手紙では、「この偉大でまことにりっぱな荘大な戦争⁴⁾」とまで感動的に評価し、その結果はどういうことに終るだろうかと不安感と好奇心を込め、「この巨大で痛烈な災厄が終ったらドイツ人の心はまえよりいっそう強く、誇らかで、自由かつ幸福なものになるだろう⁵⁾、」という期待をリヒャルト・デーメルに述べている。この時期には「魔の山」の最初の数章は既に書き進められていたが、人心を昂揚させる突発した巨浪のさ中で、マンは精神的にどうしても落ち着いて小説を書く気になれなかった。長男のクラウス・マンは当時の雰囲気「転回点」の中で次の様に回想している。「私の目の前にはためく旗、珍妙な花束で飾られた灰色のヘルメット…それからまた旗の波——それは黒・白・赤の奔流だ——現れてくる。どこもかしこも大言壮語や愛国歌の騒々しいリフレーンでいっぱいだ。『ドイツ、すべてに冠たるドイツ』と『叫び声が雷鳴の様にとどろく…』とが繰り返される。そのとどろきはもうおさまることがない。一日おきに新しい勝利が祝われる。けしからぬ小国でベルギーがたちまちにして片づけられた。東部戦線から同じく感激的な戦報がたええられる。フランスはむろん崩壊寸前だ。最後の勝利は確実だと思われる…皇帝はどんな国と植民地を合併することになるのかということが議論される⁶⁾。」

かかる状況の許でトーマス・マンも所属していた作家・知識人グループの者たちは、冠たるドイツ精神をバックボーンにしてヨーロッパの文化的政治的統一が、勝利によってもたらされることをあからさまに表明していた。もともと心情的には非政治的な態度を取り、時代の政治政策に対する批判の責任とは無縁でありたかった彼らは、祖国ドイツへの陶醉、愛国の倫理に盲目的に興奮していたのであった。オーストリアの衛戍病院で救急看護に専念していた詩人ゲオルク・トラークルは、この戦争に対する忌避、恐怖からみずから命を断った出来事はわずかな例外であった。トーマス・マンも「戦争時の思想」(1914)の中で勝利を願い信じていた様である。「戦争！我われが感じたことは、それは浄化、解放であり偉大な希望である。そのことだけについて詩人たちはうたっていた。彼らにとって帝國的権力とは何か？商業支配とは何か？そもそも勝利とは何なのか？我われの勝利、ドイツの勝利は、それがたとい我われの目を涙で濡らしても、幸福のあまり夜眠らせなくても、勝利は今日まで決して詩にうたわれたことはなかった。勝利の詩はまだつくられなかったことに人は注意すべきである。詩人たちを興奮させたものは、運命的な訪問者としての、倫理的な必要としての戦争そのものであった。それは極めて深刻な挑戦に達しそうな心の用意の中での、未だ聞いたこともない、偉大な熱狂的な国の同盟であった。その心の用意とは諸国民の歴史が恐らく今日まで知らなかった程度の全面的な決心なのであった。平和の安穩が毒に変えてしまった凡ゆる心の恨みは、今どこに行ってしまったのか？ たが不幸の想像が頭をもたげて来た…『我われは取り囲まれたら、我われの産業活動に対し原料の供給が断たれ、国民が仕事もパンも無くしたら、我われはとんでもない程の税額を申告することになるだろう…ドイツが成り立っていくためには、ドイツ・コンミュンがやって来るだろう…』⁷⁾」若干の不安を洩らしてはいるものの以上の様な楽天的な論調のこの論文は、国粹者グループ中で感動を呼んだ。

1914年11月同じ頃、フィリップ・ヴィトコフに当てた手紙の中では、1756年の大同盟についてエッセー的な文章を書いた後で、「魔の山」の仕事を充分続けることが出来るだろうと思うと延べ、「心配、好奇心、緊張感は大へんなものですが、我われの勝利は歴史の進み方の中にあるように思えます。」しかしドイツの行く道と運命とは他の国ぐにとは異っています——いち応もう一回大変な不幸が起るかも知れません——しかし勿論いまのところその兆候は確かにありません⁸⁾、と結んでいる。トーマス・マンにとってのドイツの勝利を確信させ、合理化させたものは、それはヨーロッパの平和を保証するものだからであり、「ドイツ魂⁹⁾」の堅持は文化の繁栄につながると考えたからである。当時の知識人たちは政治的に文化的に統一されたヨーロッパが到来し、その中でドイツ精神の昂揚を信じていた。では芸術はどうか？それは文明又は文化の課題であろうか？マンの「戦争時の思想」によれば、「進歩とか啓蒙に対し、社会に対する規則の快適さに対し、要するに人類の内面的な文明化に対し、芸術が関心を持つことは無縁である。芸術のヒューマニティは極めて非政治的本質であり、芸術の成長は国家や社会の形態とから独立している。熱狂と迷信とが好都合な作用を及ぼさなかった場合、それらは芸術の繁栄に邪魔にならなかった。芸術は理性と精神よりも情熱と自然とにより親密な関係にあることは確実である…芸術は保護する、形を造る力であり、形を破壊する力ではない。芸術は宗教と性愛とを親戚関係にあると説明することで、人びとは芸術の栄光を称えた。そして芸術は人生の根本的究極的力と同等に見なされてよい。その力とはあらためてまさに丁度私たちの大陸部分と我われみんなの心を動かした力である。私は云いたい、それが戦争だと¹⁰⁾。」ここでマンは戦争を「人生の根本的究極的力」と呼び、政治的社会的関係の領域に侵入するという芸術の権利を否定するのである¹¹⁾。第一次大戦勃発当時とその後暫く、反戦グループの規模は小さく従ってその影響力もドイツのみならずヨーロッパ全土に於いても弱いものであった。カール・リーブクネヒトやローザ・ルクセンブルクの警告に耳を貸す人もわずかであった。第Ⅱインターナショナルは機能を発揮しないばかりか、その中核としてあらゆる機会に帝国主義的戦争に反対してきたドイツ社会民主党は、開戦と同時に反戦の態度を一変し、議会で戦争出費に賛成、政府・軍部と戦争遂行に協力することとなった。この社会民主党の裏切り行為は全世界を驚かしたばかりでなく、ドイツのプロレタリアートの広範な人びとを幻滅させ、殊に排外主義的軍国主地的巨波の中に巻き込んでいったのである。従ってトーマス・マン研究家デーゼルゼンは、保守主義的体制順応的マンの当時の態度を次の様に指摘している。「我われは見逃してはいけない。トーマス・マンはドイツ国民の圧倒的多数が、当時考え感じていたことを考え表明したのである。ドイツの知識人の、老いも若きものの世代の多数が、言葉や文書や行動で証言したことを。だがしかしトーマス・マンは多数の人びとより、より根本的に、より持続的に、より執拗にそれを行ったのである。——更に言えば、より強情に、——¹²⁾」

かかる戦意昂揚的論調の前に、必然的に反戦グループの中に鋭い反論が現われた。まずロマン・ロランはジュネーブ・ジャーナルの論文で、トーマス・マンを「誤った独断」「悪の狂信¹³⁾」と云って非難したのだが、このことにマンは憤慨してしばらく念頭から去らなかつた。当時マンは自分の着想を正当化するために、プロイセンの勢力と独裁的君

主制の発展を、歴史に遡って研究を進めていた。この様な歴史的過去に温めていた問題意識の成果が、1915年の「フリードリヒと大同盟・その日と時のための或る概要」というエッセーとなって現われた。1912年に出版された「ヴェニスに死す」の第2章で、アッセンバッハが散文叙事詩「フリードリヒ大王」の作者で、その清澄で力強い文章は官選の教科書にも採用された、として紹介されているが、これに先だつ1910年1月兄ハインリヒ・マン当ての手紙¹⁴⁾の中でもフリードリヒの計画について言及していた。この古い計画は大戦を契機に、一気呵成の戦時の粗描となった。この中心をなす論旨は、プロイセン王フリードリヒによる1756年のザクセンの中立の侵害であり、その国家の占領であった事件である。

「フリードリヒは… 8月29日ザクセンに侵入した。

この平和と国際法に対するかつて無い侵犯行為に対してヨーロッパ中に沸き起った喧騒は、まさに想像を絶するものがある… しかしヨーロッパの声を聞く前にフリードリヒの声を聞いてみよう… ザクセンが好機到来と見た時に適方へ走ることのないようにするために… ザクセンは心情的に悪意において同盟側に立っていたのだ… フリードリヒは字句からいえば確かに不正をはたらいたとしても… 彼の行動はまったく止むを得ぬ正当防衛だったのだ¹⁵⁾。」この戦争さなかの論評はベルギーの名こそ一度も出て来ないが、明らかに1914年のドイツ軍のベルギー侵入を彷彿させ、またベルギーの中立侵犯を正当化しようとするマンの意図が読み取れる。反動的なプロイセンの歴史既述に続いて、引き出して来た彼の結論は、侵略戦争に対する或る反語的表現（イローニッシュ）を込めた賛意であると同時に、その君主制の中に悪と善の姿のを見て、彼の曖昧で懐疑的な性格を語っている。「正義ということが伝統であり、多数者の判断であり、『人間性』の声である限り彼は正義を踏まえていなかった。彼の正義は力を発揮しつつあるもの正義であり、問題を含んだ、まだ正当とは認められていない、まだ是認されていない、これから闘いとり造り出さなければならない正義であった¹⁶⁾… 世界はプロイセンに対してその行く手をあげざるを得なかったのだ。— その行く手はこれ以後も険しい運命的な道であり… 教訓的な転回点に富んだ道であることが今や明らかになった¹⁷⁾… 彼は犠牲者だった。彼は不正をはたらかねばならず、思想に反抗して実人生を生きねばならなかつたのだ。彼には哲学者たることは許されず、王であらねばならなかつた。一個の偉大な民族のこの地球上における使命が、達成されるために¹⁸⁾。」この小論の中でマンが強調したことは、単なるプロイセン王フリードリヒ二世の崇拜ではない。彼が賛美したのはプロイセン精神であり、この論評が呼び起こすであろう広い読者層の感情とは別の、「狡いそして懐疑的な方法で」賛意を表明した、と1915年3月パウル・アマン宛ての手紙で語っている¹⁹⁾様に、開戦直後とは好戦的な論調は、かなり冷静さを帯びている。マンによれば、ロシアの領土拡張は食欲旺盛で、それは野性的に根源的なもので、責任を問えないものを感じるが、これに反し西側の諸列強は、文化的尺度をもって測られる存在であり、責任能力があるが故に、ドイツにささやかな土地も許さず、陰謀をめぐらして開戦に追い込んだことは、人間的に有罪だと云えるのである。しかしアマン宛ての手紙で次の様に書いている。彼が今はお固く偉大なものであると信じるドイツの将来、この戦争が終ればプロイセン精神は、ドイツにおいて歴史的使命を終え、克服されるべき

ものなのである。「私が心から願うのは、このプロイセンの精神の克服が、侮蔑と汚辱とでする破局的な形で行われなくてほしいことです…何故ならそんなことになれば、ドイツ国民は自分自身に対する信頼を酷くはぐらかされ揺がされるかも知れないで、ドイツやヨーロッパの将来を考えると、そうなるはずはないのです…私が望むのは、政治的プロイセン主義の克服なり、戦後到来するに違いないドイツの民主化なりが、ドイツを浅薄化することなしに、国の陰気な悩みを晴らしてくれることであり、ドイツが民主的な世界文化への指導的役割を引き受けるために、現実世界とのドイツの関係がより親密でかつより明朗なものになることです。—何故ならアメリカの手に指導的役割が渡ってはならないからです²⁰⁾。」この様ないささか楽天的な或は独善的なマンの見解は、将来如何なる展開を示すだろうか？大戦時中の彼の精神的態度は、書簡やその他の出版物から推測出来るところでは、大変複雑であり、矛盾した不安定さを見せている。

(3)

この時に世界観上のまた時局政治的に、極めて立ち入った討論を交わした対照的な二人の人物は、文芸史の教授、ニーチェ崇拜者でケオルゲグループに近い反動的唯美主義者のエルンスト・ベルトラムと、オーストリアの文献学者、文化史家でロマン・ロラン崇拜者で民主主義者パウル・アマンであった。アマンは当時トーマス・マンより9才若いキムナジウムの教授であり、また予備役将校として前線にたびたび赴き、何度も負傷した経験があったので、戦場にも行かず銃後の良く保護された机上の戦士であるマンは、アマン対し密に負い目に似た感情を持っていた。かかる事情からマンは、彼と親近な立場の人びとには誰でも、怒りと不快の念で応答していた批判や反対意見に対しては、アマンのからのことであれば素直に受け入れるのであった。こうして当時未成熟の思想も、数年後により確たるものとなるような熟慮を、アマンの論拠によってうながされるのであった²¹⁾。だから特にマンのパウル・アマンとの文通は、我われにとって重要であり、当時のマンの複雑な心境を知るためには大変興味をそそるものである。1915年2月のアマン宛ての手紙には、「つい先ごろ脱稿し近々のうちに発表されるはずのフリード二世と1756年の同盟についての論文御送りします²²⁾。」と書かれている。そして更に「歴史的な立場から見た場合のあらゆる権利・本当の意味での近代性のすべて・未来・勝利者となる運命などはドイツの側にあること、」を確信して、「ヨーロッパの社会的再編成という課題を、」解決する力が西側諸国にはないから、「この課題解決こそドイツの使命であることは明らかである²³⁾。」と云うのである。

開戦初期の段階では戦争遂行の先頭に立つ官憲国家の前では、沈黙を守っていた兄ハインリヒ・マンは、ロマン・ロランに続いてこの沈黙をエッセー「ゾラ論」で以って破ったのである。これはドイツの仮借ない好戦的愛国者グループの知識人達に向けられた、ハインリヒの「われ弾刻する！」であった。彼はまたかつて「臣下」(Untertan)を書いた意識をもとに告発したヴィルヘルムの反動的な国家体制に対して行った、徹底的な批判であったが、出版者ヴォルフによって戦時中の公の出版は企図されず、個人的な参考までに限られた人に発送された。「ゾラ論」は次の様に始まっている。「全ての人の中で現

実世界を最大限に把握することが定められている作家は、長い間ただ夢を見、憧れを感じて来た。早くして才能を枯渇させることになる人びとの問題は、既に20年の始めに自意識をもち、世界にふさわしく登場することだ。真の創造者は遅くして、一人前の大人となる²⁴⁾。」弟のトーマス・マンはこの始まりの文章に対し、兄ハインリヒの自分に対する仮借なき感情の逆撫でと見なした。彼は20才の前既に短篇集「小男フリーデマンを出版し、長篇「ブデンブローク家の人びと」を手がけ一作家としての出発を始めていた。「ゾラ論」は更に続けて云う。「彼は創作活動を通じてかく成長して来た。芸術を通じての世界認識の経験が、精神と呼ばれる世界克服を彼に教えた。最も偉大な芸術は外ならぬ精神の道なのである。精神的な愛は説明のないまま、この芸術家の最初の人間描写の中に既に現れていた。その説明はそれ自体の中に表現され、かつ精神化への意志として、非常に偉大な出来事を基礎にしている者、精神を知り体験し長い労働によってそのために立ち上がる意志を獲得した者は、ゾラの後を追いついて彼を見つめて来た世代からインテリと呼ばれたのである…精神的な現われ方を物欲しそうにただ触るだけではインテリになる可能性はより少ない。悪い精神に思想上の支えを提供するあの低級は饒舌家たちは、最も可能性がない。彼らは自分たちは様ざまな認識力を持っていると過信し、あらゆる認識力を越えて自分たちは、不埒な暴力の自慢家たり得ると思いつこんでいるのである…或る戦争が必然的で倫理的でもあり得る。そうして悪い精神の持ち主は、打ち負かされるのである…精神の情熱を通じて偉大な市民ヴォルテールは自然の力そのものだった。——市民的な労働者、政治上の見せ物的論争劇の軽蔑者ゾラは、現実の構造の中に侵入し、破裂し憎悪を鞭打ち、その結果を制御出来ない行動に走るというデモーニッシュな行いにかかられている自分のことを或る日知る。人間たち、を即ち次の世代の間も、国民を他の友人たちを、そして自分自身を硬直した破滅の前へと導いて行く衝動に²⁵⁾。」畢生の大作ルーゴン・マッカールの1巻「ルーゴン家の繁栄」をゾラは、1871年31才の時に出した、これは副題が示す様にフランス第二帝政期のある一族が、様ざまな社会環境の中で如何に生き滅んで行くかを描き、93年53才の時20巻でもって完成を見たが、「居酒屋」「ナナ」「ジェルミナル」等が含まれている。下層の人々のあまりにも悲惨な生活のリアルな描写は、読書の嫌悪と非難を招いたが、またそれ故に皮肉にも世間から高い評価も得ることとなり、作家としての不動の地位を獲得した。「われ弾刻する」と題した大統領宛ての公開書簡を発表して、一大反響をまきおこしたのは58才の晩年のことだった。

この正義と民主主義者ゾラを賛美した兄ハインリヒの「ゾラ論」を、トーマス・マンは自分だけに向けられたあてこすつと見なし、神経質胆汁質の彼は直ちに憤慨した。一般の人びとには何ら怒り対称にもならない筆の表現では、「悪い精神の持ち主」であると云い、兄弟関係の決裂のきっかけとなった。これに杞憂したハインリヒは1917年12月和解の手紙を送っている。「ゾラと題した私の抗議文書は、人を傷つけるために出しゃばり出た人びとに向けたものと私は思っていたのです。君だけに向けられたものではありません…それが絶望的と思えた時でさえ、私は歩み寄りを試みたのですが…²⁶⁾」しかしこの時から4日後の手紙でトーマスはこの和解の試みを厳しく拒絶したのである「兄さんがゾラ論であえてし、あえてぼくに要求したようなこと——あんなことは、ぼくは一度

もあえてしたことはありません。その二番目文からして既に非人間的な過激な言葉であるあの華麗な文の駄作論文のなかのように、真にフランス流の意地悪さ、誹謗、中傷のかぎりをつくした後で兄さんが、『絶望的と思えた』けれど『歩み寄りを試みる』ことが出来るなどと考えたことこそ『おのれの心をひろびろとした世界へと高めた』男の軽薄さの何よりの証拠です…我われ兄弟がおちいつている悲劇をそのままさいごまで行かしておいてもらいたいのです²⁷⁾。』トーマスの指摘している二番目の文というのは、「ゾラ論」の始まりの「既に20才の初めに自意識をもち」云々の文章であろう。この様な文面は国民一人ひとりの生活の基盤は如何にあったかを背景に考えると、非常に感情的で自己中心的聞えて、笑上に思えるものだ²⁸⁾。この和解は4年後ハインリヒの病床において、成立することとなった。そしてマンは1922年の秋、「ドイツ共和国について」の講演の中で、自己の世界観の変遷を明らかにするのである。しかしハインリヒとの当時の見解相違は、マンにエッセイ的告白の書「非政治的人間の考察」を書かせるきっかけとなり、長い自己検証の道が始まったのである。

1918年8月には時局には暗雲が立ちこめていた。1917年3月に始まったロシア革命はドイツ労働者階級にも大きな影響を与え4月には軍需産業の12万5千人の労働者の大ストライキが起った。西部戦線では357万の大軍とあらゆる砲火を動員して、3月21日最後の大攻勢に出たが、その日のうちにドイツ軍の中央部は突破され7箇師団が全滅した。この事によりルーデンドルフは、この大戦でのドイツ軍敗北と観念せざるを得なかった。国内では食糧事情は全く悪化し、多数の餓死者が続出し、迫りくる破局はもう目前であった。この様な時にトーマス・マンはアマンへの手紙の中でこうもらしていた。「私は告白しますが、未来の国家を前にして神に対する畏敬の念を感じるのです。私のような人のため、私のような人に申し出されるようなほんとうに軽いことがらのために、何か住める空間があるだろうかと、疑問するようになり始めました²⁹⁾。」

Anmerkungen

- 1) Thomas Mann: Lebensabriß, in: Thomas Mann Gesammelte Werke XI, S. 127-128.
- 2) Thomas Mann · Heinrich Mann: Briefwechsel 1900-1949, Aufbau-Verlag Berlin und Weimar, S. 117.
- 3) Heinrich Mann: Zola, in: Die weissen Blätter, eine Monatsrft, Zweiter Jahrgang 1915. S. 1361.
- 4) Thomas Mann: Brief an Heinrich Mann von 18. 9. 1914. Briefe 1889-1936 Herausgegeben von Erika, S. 112.
- 5) Brief an Richard Dehmel von 14. 12. 1914. a.a.o., S. 114.
- 6) Klaus Mann: Der Wendepunkt, Ein Lebensbericht. Rowohlt Taschenbuch Verlag, 1989. S. 50.
- 7) Thomas Mann: Gedanken im Kriege, Gesammelte Werke in dreizehn Bänden, S. Fischer Verlag, XIII. S. 355.

- 8) Thomas Mann : Brief 1889-1936, Herausgegeben von Erika Mann, 1962, S. Fischer Verlag, S. 113.
- 9) Roman Karst : Thomas Mann oder Der deutsche Zwiespalt, Verlag Fritz Molden · Wien-München-Zürich. S. 76.
- 10) Gedanken im Kriege, a.a.o., S. 529-530.
- 11) Roman Karst : Thomas Mann, a.a.o., S. 76.
- 12) Inge Diersen : Thomas Mann, Episches Werk Weltanschauung Leben, Aufbau-Verlag Berlin und Weimar, 1997, S. 122.
- 13) Roman Karst : Thomas Mann, a.a.o., S. 77.
- 14) Thomas Mann Heinrich Mann : Briefwechsel, Herausgegeben und mit einem Nachwort von Ulrich Dietzel Aufbau-Verlag Berlin und Weimar 1977, S. 89.
- 15) Thomas Mann : Friedrich und die große Koalition. Ein Abriß für den Tag und die Stunde, a.a.o., S. 116-117.
- 16) Ebenda, S. 122.
- 17) Ebenda, S. 133.
- 18) Ebenda, S. 135.
- 19) Roman Karst : Thomas Mann, a.a.o., S. 77.
- 20) Thomas Mann : Brief an Paul Amann, vom 25. III 1915. Lübeck 1953, aus Deutscher Bücherei Leipzig.
- 21) Inge Diersem : Thomas Mann, a.a.o., S. 130.
- 22) Thomas Mann : Brief an Paul Amann, vom 21. II 1915, S. 26.
- 23) Ebenda, S. 30-31.
- 24) Heinrich Mann : Zola, a.a.o., S. 1312
- 25) Ebenda, S. 1355-1351.
- 26) Heinrich Mann : Brief an Thomas Mann vom 30. Dez. 1917. a.a.o., S. 119.
- 27) Thomas Mann : Brief an Heinrich Mann vom 3. Jan. 1918. a.a.o., S. 120-121.
- 28) Inge Diersen : Thomas Mann, a.a.o., S. 124.
- 29) Thomas Mann : Brief an Paul Amann vom 11. VII. 1918. a.a.o., S. 60.